



港南中便り

第22号

学校公式ホームページ <https://konan-j.esnet.ed.jp/>

主体的・協働的に活動する生徒

課題は「学ぶ意欲とスキル」を育てること

令和元年度の教育活動を、生徒・保護者・教職員の三者で4段階による評価を7月と12月に実施しました。その結果を考察し、今後の教育活動の改善と充実のための取組を立案し、2月7日(金)に港南中学校関係者評価委員会を開催し、地域関係者、及び、保護者代表による委員の皆様から御意見と御助言をいただきました。その評価を受け、校内で次のように整理しました。

生徒同士が協力・協働することを通しての互いに高め合える集団づくりや仲間と共にやり抜く場を設定し、やりがいや達成感を味わわせることに対しては良い評価となりました。一方、昨年度と同様に、家庭学習に生徒自らが主体的に取り組むことへは低い評価となり、生徒の学ぶ意欲とスキルを高めていくことが課題であることが再確認できました。

本年度の学校評価を基に、令和2年度の教育活動をより一層改善・充実させてまいります。

※ 判定基準 A：平均3.2以上 B：平均2.6以上 C：平均2.6未満
 ※ 評価判定 上段は、7月調査結果 下段は、12月調査結果

重点目標	具体的な取組内容	総合判定	評価			考察と今後の取組	委員会からの所見	
			判定	対象	平均			
意欲的な学習活動の推進	① 基礎・基本の確実な定着と「学ぶ喜び・学んだ実感」のある授業の工夫	B	B ↓ B	生徒	2.9 2.8	意欲的な学習活動の推進のため、次のことに共通実践してきた。 1 学ぶ意欲を高める →教科の原点を見つめ直して、日常生活の視点からの教材を工夫する。 →教員が率先して範(熱心な授業、読書する姿)を示す。 2 授業改善を求め続ける →学習課題を「投げかけ型」から「問いかけ型」の表現にする。 →板書の基礎的技能を学び合う。 結果、大きく成果が上がったわけではない。加えて、④家庭学習に主体的に取り組める生徒への育成は大きな課題である。 今後とも、上述の取組を継続し、更に工夫・改善していく。	学校の考察と今後の取組により推進するとよい。	
				保護者	3.2 3.2			
				教員	3 2.9			
				B ↓ B	生徒			2.8 2.8
					保護者			3.1 3.1
					教員			2.7 2.8
	B ↓ B		生徒	3.1 3.1				
			保護者	3 3				
			教員	2.9 2.9				
	④ 家庭学習に生徒自らが主体的に取り組める手立ての工夫		B ↓ B	生徒	2.6 2.6			
				保護者	2.6 2.7			
				教員	2.6 2.6			
		教員		2.6				

重点 目標	具体的な取組内容	総合 判定	評 価			考 察 と 今 後 の 取 組	委員会からの所見
			判定	対象	平均		
主体的な生徒活動の推進	① 仲間と共にやり抜く場を設定し、やりがいや達成感を味わわせる工夫	A	A ↓ A	生徒	3.2 3.2	9月以降、運動会、校内合唱コンクール、創立60周年記念行事等々の活動があり、その活動を次の過程で構成してきた。 ①目標を立てる ②目標を達成するための計画をつくる ③工夫しながら活動を進める ④活動の成果と課題を見いだす ⑤次のねらいを立て、計画をつくる。 結果、成果を上げることができた。 今後は、この取組を継続するとともに、特別な行事のときだけでなく、朝の会や終わりの会などの日常的な教育活動でも取り組んでいく。	学校の考察と今後の取組により推進するとよい。 学校の様子を参観すると、いつも生徒は主体的に活動していると感じた。 特に合唱は、すばらしい。合唱コンクールや創立60周年記念行事等々、様々な合唱を聴いた。本日の少年の日記念合唱も生徒が身を乗り出すような姿勢で、情熱的に歌っていた。少ない練習の中で、ハーモニーのすばらしさに驚嘆する。 多くの生徒を導く教師の力、そして、生徒のリーダーの力を感じた。
				保護者	3.2 3.3		
				教員	3.1 3.2		
	② 生徒理解・教育相談を効果的に行い、自己管理能力を高める指導の充実		A ↓ A	生徒	3.2 3.2		
				保護者	3.2 3.3		
				教員	3.2 3		
	③ 生徒同士が協力・協働することを通しての互いに高め合える集団づくり		B ↓ A	生徒	3.1 3.4		
				保護者	3 3		
				教員	3.1 3.2		
	④ 切磋琢磨する部活動等の充実による個性の伸長と自信を持たせる工夫		B ↓ B	生徒	2.7 2.9		
				保護者	3 3		
				教員	3.1 3		

重点 目標	具体的な取組内容	総合 判定	評 価			考 察 と 今 後 の 取 組	委員会からの所見
			判定	対象	平均		
充実した道徳教育の推進	① 互いを認め合い、励まし合う仲間意識を高め、安心できる支持的風土のある集団づくり	B	A ↓ A	生徒	3.2 3.3	次の取組を実践してきた。 1 「人としてどうありたいか」「どうあるべきか」を考えさせる。 →自己有用感を育てる朝の会や終わりの会の内容を工夫する。 →11月の人権・同和教育の事前訪問に学年部全体で取り組み、学年部での研修を充実させる。 数字上の大きな成果は見えないが、教員の人権・同和教育への取組は、計画的・組織的なものとなり、充実した取組が推進できた。 今後は、教育委員会や関係機関から指導いただいたことと「第3次とりまとめ」の人権教育の視点を活用した取組を更に推進する。	学校の考察と今後の取組により推進するとよい。 伊予市の地域特性として、新しいことに挑戦する気風がある一方、周りにどう思われるかを気にする、横並びの意識もある。だからこそ、学校と家庭、地域が連携を深めての人権・同和教育を進める必要がある。本年度の取り組みを繋ぎ、来年度へ更に工夫・改善し、部落差別解消の歩みを進めてほしい。
				保護者	3.2 3.2		
				教員	3.2 3.2		
	② 有用感を感じ、人としての生き方について考え、議論する道徳の時間の指導の工夫		B ↓ B	生徒	3 3.2		
				保護者	3.1 3.2		
				教員	2.5 2.7		
	③ 互いに夢や目標を語り合う場や機会の充実による自己肯定感の醸成		B ↓ B	生徒	3.1 3.1		
				保護者	3.3 3.3		
				教員	2.7 2.7		
	④ 自己評価・他者評価による自己認識・他者認識の力の向上		B ↓ B	生徒	2.8 2.9		
				保護者	3.2 3.2		
				教員	2.8 2.8		

重点 目標	具体的な取組内容	総合 判定	評 価			考察と今後の取組	委員会からの所見
			判定	対象	平均		
信頼・期待される学校づくりの推進	① 地域の「ひと・こと・もの」とかかわる学習による生きる力につながる教育活動の工夫	B	B ↓ B	生徒	2.9	教育活動の土台は、生徒、保護者、地域からの「信頼と期待」であることを再確認し、次のことに取り組んだ。 1 信頼関係を築く →教育の免許を持つプロとしての授業を実践する。 →教育のプロとして生徒や保護者の悩みに向き合い、解決策を提案し、共に育ち合う。 →保護者の視点から教育活動を見直す。 まだまだ研修と自己研鑽が不十分なため、成果を上げることはできていない。今後とも、上述の取組を継続し、更に工夫・改善していく。	学校の考察と今後の取組により推進するとよい。
				保護者	3		
				3.1			
	② HP、学校便り等を通じた情報発信		A ↓ A	生徒	3		
				保護者	3.4		
				3.3			
	③ 開かれた学校を意識し、保護者の願いや思いへの適切な対応		A ↓ A	生徒	3.4		
				保護者	3.4		
				3.2			
	④ 小中連携の工夫と学校運営の見直しの実施		B ↓ B	生徒	3.4		
				保護者	3.3		
				3.1			
					3		
					3.1		
					2.9		

◆◆◆ 学校関係者評価委員会からのその他の意見 ◆◆◆

< 学校が取り組んでいる次の取組を継続するとよい >

- 1 学校の職場環境を次の三つへと高める。
 - ①自分がする。 ②みんなとする。 ③認め合う。
- 2 仕事で疲れない次の三つの方法を更に推進する。
 - ①今取り組んでいる仕事を好きになる。
 - ②今取り組んでいる仕事を、苦勞せずにやり遂げることができる実力をつける。
 - ③互いに悩みを理解し合える仲間を持つ。
- 3 基礎・基本が身に付く、復習的な家庭学習を工夫する。
- 4 家庭での予習的な学習を授業で生かせるように仕組む工夫をする。

< 次のことについて、更に工夫・改善に努力するとよい >

- 1 生徒への指導について
 - ①長い目で見て、子どもを包んでほしい。
 - ②保護者として、中学時代「厳しい指導」と感じたこともあったが、その後、高校生、社会人となるとより大変さがあった。中学時代の厳しい指導に感謝した。長い人生を生き抜く力を子どもたちに身に付けさせるためにも、厳しさも必要である。
 - ③教育のプロとしての「自己研鑽」の一つとして、児童心理の視点で、言葉の投げかけを考えてほしい。
- 2 不登校生徒への対応について
 - 不登校生の「よさ」を探す意識を持って、家庭訪問を行ってほしい。教師が「よさ」を見つければ、子どもにも伝わると考える。
- 3 教師の働き方について
 - 先生たちは忙しすぎて、相当ストレスがある。ワーク・ライフ・バランスを大切にしてほしい。先生たちの多忙解消が、結果として、生徒の健全育成にも繋がると考える。
- 4 生徒の下校について
 - 下校時、遠回りをしている様子の生徒がいる。いろいろな道を通って新鮮な気持ちだろうが、何か起きたらと心配もする。